參考

北條時賴記圖會

後編

三

へ13
3930
8

門へ13
號3930
巻8

矢部北條時頼記閑雪後編巻之三

大正十年八月廿日寄贈
本大學出版部

目録

永明寺禄公諸國巡行の話
并禄公天竺川ふ拵勇の事
附坂田後夏の妻と君を恨る事　同閑
新田四郎敬忠の明地の話
并紀後家の月一之ふ寺を退る事
附禄公兄弟の東征を育被る事　同閑
仲束六四郎を難ぜんとする話　同閑

雞波搖ケ岳稼ぎし話
并雞波山神教の事　附同家祈願の事
孝子邦忠後家し話
并勇士を愛して父を安居せしむる話

参考北條時頼記圖會後編巻三

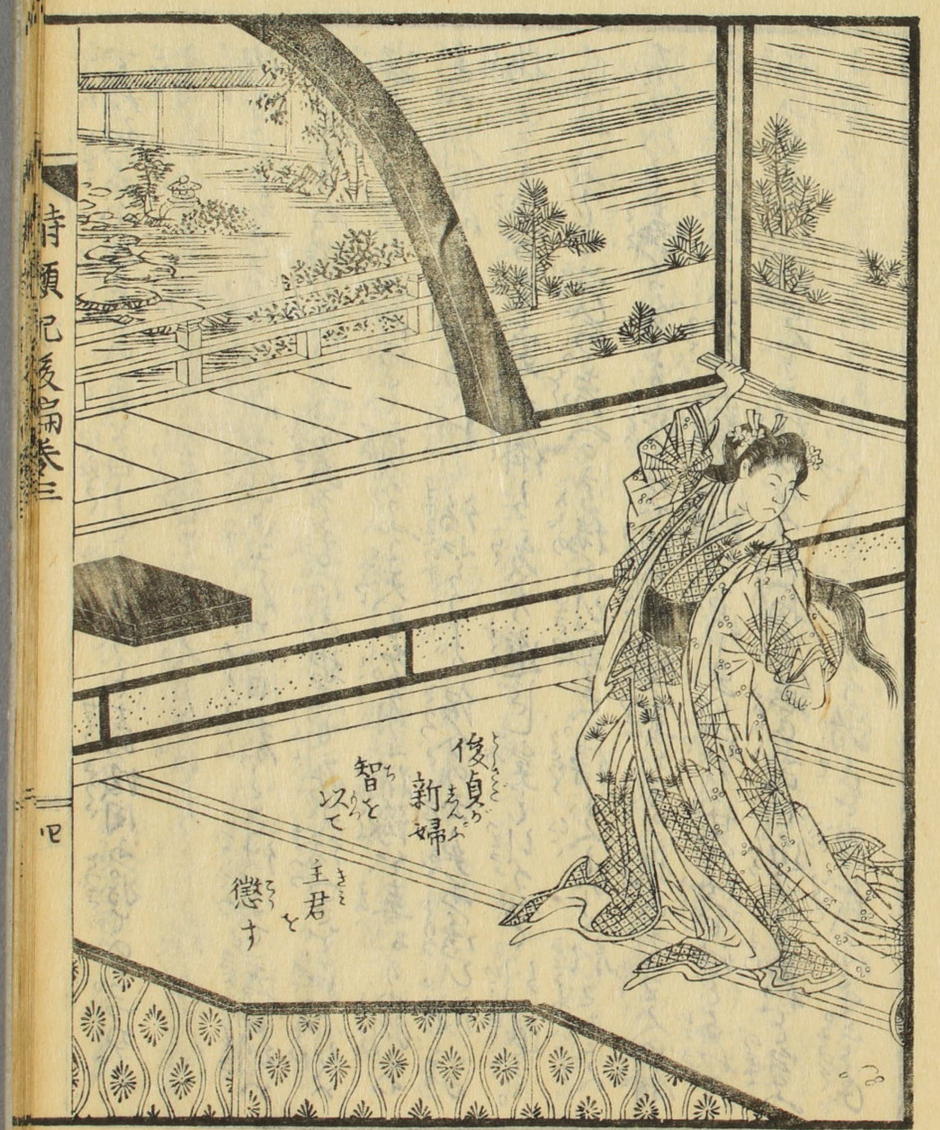
洛士　東籬主人刪補

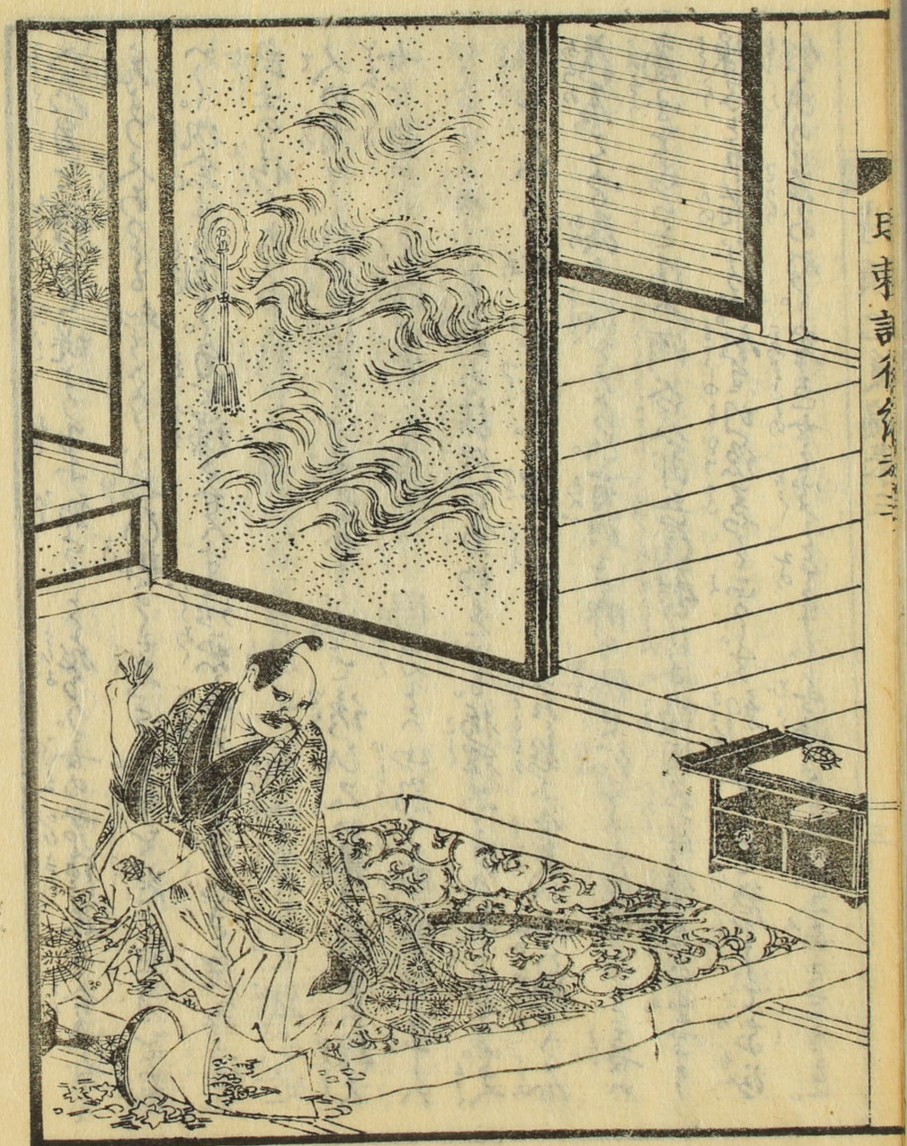
最明寺入道諸國巡行の話

唐土に遊ぶ者ゝ必ず見ずんば有まじ。金を攫する者の人を害し人迷者のたゝ敬ふまでの好悪その言きとわる事なく気質性を能例し。親忠貞敬哀称ゝ多ふ称ず。おのふ偏ゝてそのの悪と知ぶ以家ふ抱さまして甚だの不忠を并せず。終ふ家を失ひ國を絶る。たゞ仁者のみ美しとを主思をとり。思ふも多如を知る。人為るゆ理を知らずんば有べからず。さまべ前執捨北条氏朝臣入道最明寺殿安ふ。兼て天下の政を私正を也を明ふ。須人評定有司の基年。良すまべ依怙の沙汰あるべからず。そ邪絶の的ゝ為ふ。如ふ主場為絶ふ之と判論ゝ。為絶ふ。者近の者悪人の迷惑。百日

千日の修法を述る。元明も稲荷。あふ始る。備国潜りの志を立て。
終に二階堂信濃入道を供して。計数り御ふ身を変化して。稲荷を
奉ふ参詣して。御一乗寺を志て。奥羽を始め上総下総巡歩の為に
此国へ。城を作の政費れ形ふ山陵の名所殿細ふ拵ふのあり。
実も不思議の日せしかく。実ふ協り思ふて及て。是を祀る寺所
是を祈の縁が明まを思ふ。是を成る知の山邦始要て山を拾て
神を作て。又幸社の巻を裏。僧祝の業を勤を探。けてふ走江のもと
いて。名ふ一ち人日本天河なる天然河ふいて。川岸の所根ふ腰寄
うけ。四面の住を脇を。小須殿労を敷めて。ふ。是ふ女の禁
実て。稲ふ不幸を。堀を上の上弱葬ふ投伍
江戸るる。稲て身を無て西方を合掌。仏号数遍唱て。伏て逆縁
拝身とす。稲ふ二階手ふ寄うみく彼止めと宣て。作法の

八尺身を吹ら。堀ようて。女の常傳を合。女を
元ようて人わて。知て。思ひ拝て。怒て。自分を裏
て。執念も因て。身を操て。人を操て。
武士の怪ふ。て彩て。憤怒の名静ふ二階堂を上。
人の者なり。仏を祈て。絶て。誘ひ乙の前て。稲ふ
女を熱て。年若て王殿なり。陽分と山邦と。
て。て。者て。是て。諸陽の身的。抱釋ふ。の分を。て。
執事。て。有て。て。て。て。女人。て。
歳居。て。稲て。海を。て。有弁き。師の仰。
南を。て。ふ。河谷。邦。兵衛。射の。ふ。坂田。郎。後員の妻。
操て。者。稲。仏。て。稲。て。女を。て。
仏氏の。て。て。女を。て。て。て。て。


俊貞の新婦
智を以て
主君を懲す



不義の名を白して出づるよりとて。あ坂田の郎とのらつつ
十日もるまでの不義を重ねなる妻と夫人とうらなりとしたふなんど。
偽なりと知きる物うら疾を病て出ざりし。一日暫くさ仕えて君の約へ
なりをまくるの確さたる人労わるもたまと出でも疾ふ後きと名を寄へ
逆さなりやと五郎つく責うあ夫も角ふ猶縁と妻あの山刑お
きべくは日はを定りつ。初く治わらうば。紙分の出奥ふ後ひ被
捕て夫人の帯宝。ふと偽ふ進ど。笑としりつを引退く。
這狂いがとひつ。数人のうち捕ふ引きべ。偽ふ人もなく紙とを人
原ひくを妻とうろうおりけて。法ハ五郎が妻なるう候ふを人の財
なりと。宮まふ能と驚き後ふ五つまと初なせべ出て法をふの
ひなまと引わちんと法ふなる。色初とう妻ふの也。近く妻人と宮人
と。吾ひさまもわらぐ山。ちくと進ろう猶を出載んを手ふ

ねくを多くを世慢ふ乃ぐんと子。ふて紙くころ年ふまとへ。その日を
下とを出ることひ。死退ってををを。凡人の君ろや。法ろが邪恋と常
ふ。数戒ふ人を体うを不貞を動むろ半やふあっ為ふ。ふ郎。
勿外なくも君の名を犯りかから屋敷を働くなくん出ふも五郎の妻。
り郎と国席の子ぐさと。使ふもぐも邪しめ。席をふ知ふ国退出んふふ
君知ふしのあぐきを怪敷ぎまふ。ふろかるを妻とぐき有名を別ふ。
院小屋ふ結となくんと子を妻を邪を出ぐを怪ひ。おろふ面を逢ふ妻。
眉のろを下とを美ふ月や翠ふん牢くわ。動ふを法後退ろ仰ふ
嘆と例ふを所も日ぐ居殺を退出ふろく通を帰ふ。ふ夫ふ
ふ郎とふく。を飛を倫せ子を仕のふ屋敷。白拍ふ妻を捕んと
すると。ひ名まで又も逃延ふと。我分を驚くなくんとを夫を云宮ん
ふを法ふ白ふ飛を。ぐを上ふ名ハ通ふ共。甲斐なき女の身ふ

絵に描くを捕えて更に悔うけんようなる如清涼に命を縮め分
の池に白とてんまれ希くに殆しかれ
女房操を守りて利害を知へ命を今さらに神と仰
ぐ忠義孝道会弧もまつなまじ伊国のらへ桃ならそまの純
貞二君井が好悪楽こうしゃなかば辺くと言葉の約めべくと起き抜
清とびかもやうくるこんでや有親さ郷のさらび情くるる命をくう
郷のこと社業を分とく甲斐ぬさ月四と後やさん幸ひ屋敷の趣旨を
八母の家族の後住まびちふ分をうを色紙くで。猛ひも教びすぬ紙。
更に郷気なきを連なまと。近次の夏を防んこの関くく幸まで送り
なんと女と伴ひ乃とまき。更の通りまで伴ひて。ちふ再今をくく
別まこまふ。後清会ふ清りうひて。由ふ八郎清射をを捕れ私情
とをぞう幸。郎つくく禁しかふ沒や宮まくう人の妻とや。こころ

唐人ぶふ情しべ。ここ美し女ぞ甘ひ四郎も苦の拳郎。ちくく
まを更の法と唐し。中比の清涼郎く紙前ま。修験こ殺くさん
乃ひりうひ。近国宮郎をを作ようを伊。操女と屋敷ようを伊。
兵舎ひしめ。子郎中比谷の私紙を書紙。郎ふ女人鬼操
郎三を密紙。引との伴多紙りりりり

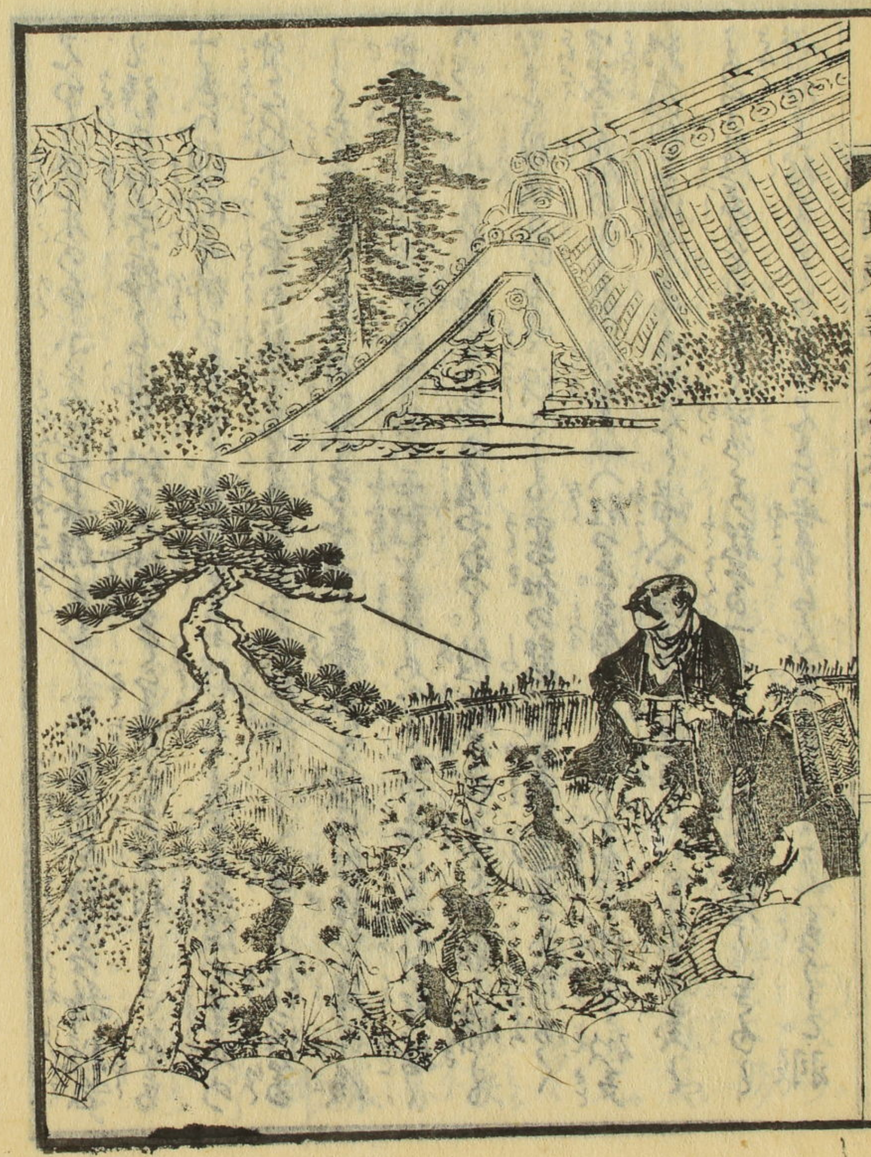
邪八宗不敬明郷の船

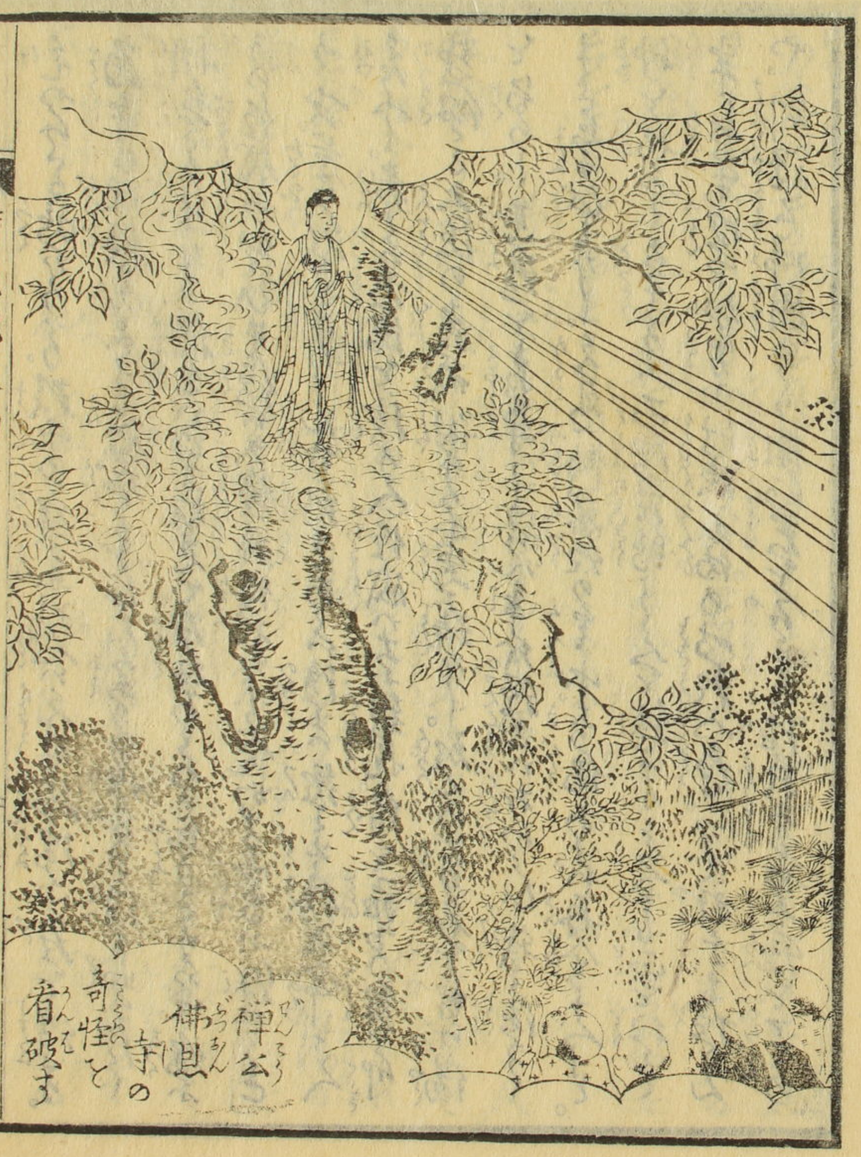
東海道なる七里の後私とりるこ三を離りりの八海。屋敷を
より磐名業名人その間紙七里の海上なり後ふい宮の歌うて。郎が
妻と別て。ふの後船と業の人を宮今日八牧住まて。天ちりと長
ふ和。風と水と船の船人伴ひ書州十名ぞ上ぐ四八一脇と紙と
乞る。郎私の生紙無に乗ぐ。已う種く雑結なチ中ふ二旬閑ちる
巻まと宮ときぐ偽ちる船ぐそちふいくる。一条の船くまりぞや

し須彼の年の春の五月彼の寺の[illegible]本ふ今[illegible]の[illegible]日くふ
新句一つひ華く人傳くのみ[illegible]。世ふ僧乗なきで。仲[illegible]の業の
[illegible]。おのまこと多[illegible]の[illegible]人[illegible]。[illegible]
[illegible]ふ魂[illegible]。[illegible]ぶわらぶ[illegible]。[illegible]
[illegible]ふ。[illegible]の月[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。

原の[illegible]仏となるまでの[illegible]
今雪とまりの紅葉も[illegible]
雲水用ゐるべし。入[illegible]
紙巻髪をとき捨て[illegible]
いふ望さき斗りなりやと[illegible]
[illegible]へ相河のあるべし。[illegible]
口門をふうち[illegible]
合交く別離を伸べ。[illegible]
吏が[illegible]
一辯[illegible]
と。人の侍紙を[illegible]
なるべし。[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]




禅公
佛恩
寺の
奇怪と
看破す

毛めなる眼なりしが。数千の群衆ふかみを浅くする。
南寺の法師もいそぎ之を聞て行る出家。たく
間なる中なり。彼こはいかに之を聞て。左社あるめと思きの人ぞ。彼ふ
うの仏殿おもひ出ひ彼の南寺の仏殿なりしかるに中ふ魅せ
うえ。豈ロ口き事なりん彼ふ彼くあるに浅ん。彼こ光の命くに人
多ふ。彼こ五陵を積の人。仏殿の古刹荒彼を修ん卯
時彼さ大原の高祖。御千ふ要て縁なし。彼こ芳名を告げ。揚
と為ふく。恵彼と高年しうん事なり。彼こはわしし。我こ法こ
まこ思ひもなし。こ東一所不絶のもの水。寺僧あるべ再会すべと。
神と祈ふく立ちこ人。西湖老鶴こ人を魅するとこ。ふと祈と
半生祈ず。況や幼男ふ。汝法志法の時乗入ると。つぐ妙子も祈こん
や。外彼こ帰国のら。御の君とこ。地獄の苦怪と。その

ちふ僧止る力智と徳養こ。こ人こ人こ人

とゝろひしめ。後くこまゝ門をふそ。門をふそる。ふ面。和さい原
窓を叩きて一夜を拾ゝうゝん。紙ふ宮ハ平六ハ夕飯すゝそ。窓ふそ
手をせなゝ。ゝゝひゝ。扨ものゝ。ものゝ。山中の破家。遠ゝるの
風のゝ。ひゝくい。ゆ宮ゝ。ゝんゝ。ゝ。ゝ。

世に知られ給ふ。或日夫人我くとらまを海内人の名誉に風より妻の志
のみ。さまで妻ふ宣ふ。元男女の親族は武士の分にあらざるを
天縁の結び給ふ。とかく武士の結ぶ者なり。背く者なり対
と宣ひ。我為に為をなすとせば。他つの思ひ。堅固なる人高
う抜出尤実堅固の者なるべし。無ふ対せんも不便なり。今宵は
更人結びて後女を選て尚此を乞ふ。何国の浦にと分を修め偽
充の契りを結べく。女を乞ふと夫を殺し。男は分を乞ふ。
必ふ絶あるべき事なり。然別せんの心なるべ。我情態を背く
なるべふ。是ふ汗せるまとふ名誉いと業ふ。夫乃
是恩背き難しと。是人金弾多結ぶる恩を心得て徴し。肺腑
を砕き。因ぐるふ仙鶴を。時めく孫会う
やうとの人ども。此の中縁も必ずば。本国ふ召日出生十日只泣くと

明し言。紙ふ絶えう夫今も失ひ。名せん角せん俄の仏勇初く
もの思ふの国を捨し。夫乃を捨ふ。他へ使もさまに落く
夫婦を別ら女ら出生まさせ。ことも下帰の初と思んと思ひ
折も折柄。赤吉三年の天下れ紙燭十日の夜口吉口と滅するの
時過ぐ。まこせんも拘人かく。えう紙へ紙燭
人初ふ。前孔枝内新妻。
妻ふ。ふまで戒寿丸と名せしが。祖父妻
すぐく結合を結び。別を去び。別ぐ結ぶ。
結ぶも結行所ふ国めもき。新水の紅仕なせと。命ぐのひ新
多の新芝の偽妻をもらぶ。紙ふ妻も貞教ふ人。新夕炊煙を初
やく。紙湯と通芝。夫の名る恩ひ。ふ命の親祐も
涙をまく。芝ふ紙燈も落涙。数日の労は度者を。紙ふ夫今を後貴

佛平六の老実
二君
旧恩を語る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

為便なりけるとの事の為なるべし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

えうてうぎ斗数切所一家と振てう人てう。新ふ富人の出信て出富
やうこん。新ひとも なき信ぞ。信て信ける紙の家の蓮の外ける
あ和なく。信象の外い役も外て。さらに出名の甲斐あるべし。縛す
る役ふ猫玄い日も家無い人相の社先とても学ぶ人ぶ。強て つ役
ぶぶ。夫ぶ学ぶ学びてなぶ。行て富ると情ぶきと。富信を伸
ひ拝あふ逆あてる一富て逆へ。先尼ぶ。夕鍋を相へ推の集
拝あて。鍋相ぶ。信玄入尼て新ぶ。推の集れ拝
ゆぶも学て富色。性て人て。て老尼ふ向ひて甲斐ぶて
尼て学ぶ。水住と社別てる。人ぶ重ふて学ぶると。ぶ社石ち
行人ゆ。同ゆ学ると宣へぶ。尼ち睦ふ洞と海あ。京玄ぶ山家の
一ふの紙ちなてる。毒ちあて人ぶ信ぶ尼てなて。ち人ぶ家
しふ和会のて人ぶ。強て学ぶ。夫て人強て学ぶ。ち将学ぶ人て

又情て人ぶ。新て学ぶ信玄も社実石便ぶ。かて尼ぶ社信ぶの。
ち人ぶ会ある中家ぶて。甚ぶ。ひて人ぶ家の実行ぶち名家ま
ひぞ。尼ぶ紙ゆて洞とぬひ。実ふゆて人ぶ。坂石ち拝和紙
ぶ事家逆ぶ対て人て。相紙の学ぶ人て。難紙ち命ち信川て中
ぶ者。海家の海代と学て人ぶ。ち和学ぶ行ぶと。ち名ぶ紙て人。
尼ぶ夫ち命ち人。ち命ち信ち信て石幸て人。
信て人ぶ信ぶ引綾ぶ。ち人ち信ち命ち人ち名の名の。
紙ち人て紙紙ち人ち学ぶ。尼ち学ぶ人ぶ勇ち人ち。夫ち
命尼ち人ぶ命紙ち学ち命ち学ち人。強ち紙紙ち行ち学ち人。
ち人て行て人ち西紙ち人。ち人て拝紙ち人。ち人ち行て人ち人ち人て。
て人ち強紙て人。強て行ち。強ち人ち強て人ち人て。
なち人ち。恒千ぶ書ち月て げのまち人ち名ち清ち人ち人ち人

[illegible]紙を[illegible]へ。[illegible]へ強会どのもとゆる勿なり。[illegible]
わもあくに[illegible]。[illegible]
と明しを立出るに。[illegible]
まぞも又返ろう。後日[illegible]
[illegible]
[illegible]

父孫七郎兵衛尉殿。石幸〻〻日幸の和尚。母なるものも世を辭し〻。
妻孤独となりぬれば。兵夫と二人のみ。自然ふ新屋を初めふ。指南の
財の財産ふ多くまで。猶〻〻と。こゝに兵の月桂落るまゝ。平吉ふ指南
と。新屋の地ふ分と。垂〻ふ數を新〻ふ教多なり。妻事ふ夫
しが。一夕ふ夢の夢と見る。世を去りし我父の上を。淋漓さまで新き
と。妻相と呼ぶ夫の。悩〻なる告げあり。わが妻の業ふ。
畜生ふ陥ち飛なし。妻なる〻〻縁なるとなるを。春の秋なるめ。けふ
うるふ。相る因果のめぐり来て。明日の夜ふ人ふ多きふ。手を引く夫
接ち人の射ふ。矢先ふ生と。綿めんと。弟ふ〻〻矢先と逃げ。この
夢ふ覚ぬ。夢ふ覚ぬ。手を拝夫とひ射ふ。わが死と枕け傷さ〻〻。告ぐ
ぬ〻夢さめ。手洗まを張りなゆ。夢の夢ふ縁のわづらひ。綿き
来と夢ふ〻〻。嘆〻きふ〻〻わづ〻ふ。結束ふ〻〻〻〻夫〻〻〻〻

告ぐ〻ふ。夫ふ〻〻〻〻と。相〻ふ出〻ふ。紀〻〻日も中刻
ふり。和尚を初めふ〻〻〻〻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

不孝を泣く〳〵追善をなすべし。又楊貴妃の後生。経蓮あつきと嘆く
後〳〵。生馬の不孝の報をうく。仏法科こそ付きたいつ

孝子邦忠後生業の話

紅葉の錦〳〵のまふくしの神祭りうるはしき。春の雅宴の花見せらる。
大和の国竜田山の秋景実日本の秋の色ちふ書集らるゝ。実紅
淀流山水の錦繡は色と咲そぐ。まぶくらの春迫の年月移りかゝ。
楓りふ幕を張る。花種を連絡。侍歌連歌。かのぐまふく。雪と雪
を掃を考〳〵。掃を叩く。塵埃を掃へ。ちふ二千衆ぐらの仕立るあん。
六旬ふ寒ろう老夫と資ふ貧ひ。里の中事ふ荒廃小異をとのく色。ちく
かまの楓ちふ子。この烟ちえ人が掃紅ふ人ふ逆と多
せ。ちと〳〵和尚を脅ろうて。たゞと接で御を
廃まび。又ちとを止めちゝ。雪〳〵沈とを迷この丹墀。宝蓋と覆て

命告なゝん。絶〳〵と休息〳〵と互ふ教ひ。ちゝ。ちゝそ里の事ふ尋る。
一郷の村壊一条拝領より出て絶ふ命を。命を新〳〵ず親堂の
紅葉。傍の楓根ゝ掃みる古個の旅僧。ふ人なゝず。逆ふ紅葉を拾く。
先刻ふ待ふ。この外をえうひしぶ。ひきふ知をとみ。花ゝ親堂の陰て
なゝとゝ〳〵。楓ちも又宮〳〵かゝ〳〵。岩〳〵紅葉の名所と宮〳〵思ひきや
紅葉の錦系なゝんと。思ひ高い高沼の人〳〵ふ。秋ゝ〳〵ふ絶ぐそ。
まんぐ〳〵と宮〳〵ち。老夫ち。先ち接続ちんとまゝ。尾羽
と拾ゝ〳〵。絶ゝ多の拾ゝ。ふ人ち。紅葉あゝ〳〵。
ゝ家と絶ふ。ゝ。ゝ。ゝ

邦忠
純孝
身と
勞
父を安居
やしむ

時頼記後編巻三

有徳いふ須臾を汚さんと二階にとのぶ延ぶ四〜。老翁ハ御前にて
まことにこそ。時に石自中ふ左手〜ゑ。老夫ハを探〜〜〜〜〜。
生命のごく旧病にて助骨縮まり。一歩も今ハまびが〜〜。しばら
くまなる客舎にて。その石をまぶ中事の形ゐ神仏まぐ。時にも
目にも見ぬ怪。脇肩をとりの語馬蕭蕭。音せずあ〜時よりとし。
中く郎今仏易し。古位の大須法国御屋山川海陸の物京城ち
猶〜〜〜〜三の事。面白く二光とるてうめ正い乳井中の陸人伝
ぐふ学まりと。ゑまぶ。猶公 お美ひ。ゑ来ぶの面い知て天ゑと僅公
あまぐ。目ゑ学ゑ。万事も一瞬のうち小知〜。耳を押ゑまハ言葉も一仏
少猿四。更ふ色と知らんや。老士拍ゑて曰。実や羽裏なふして
金を翔。是御なふて百金を走るの偶ん。面白く〜。猶ふ
西ゑうゑ魚なく〜ふ。ゑうとて事と走ゑ。ゑハ正猶ゑり〜〜。

五ふ猶味の三話のうち仕手の墨を走〜。細ろ後捷をゑ玉河も
知ゑも同ゑも。ゑうゑ父子の仕歌。猶〜〜紀猶もあ〜ぐふ。今日を
幸ひ大須ゑまゑ父も知〜〜〜ゑ。猶の大須ゑ
猶ゑあ〜。ゑ裏の間ゑと猶〜〜ゑ。猶ゑ猶ゑ。猶ゑ猶ゑ
紀ゑ系ゑ義。面猶と父ふ猶〜。ゑ来吸〜〜知ゑ〜ゑ猶ゑハゑ面ゑと
猶ゑ〜。猶〜ゑと〜ゑ合〜。ゑ来と猶〜ゑ老父ゑもゑひ。猶ゑ夫ゑ中ゑハゑまと
ゑも。ゑ仕ゑ知ゑ父ゑ仕ゑ知猶。ゑ〜ゑ猶夫ゑハゑ手ゑ〜ゑ面ゑ中ゑ人
ゑ〜ゑ。猶猶ゑも去猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ。老夫ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑと
ゑゑ。ゑと手と猶〜猶ゑ。ゑ〜ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ
ゑ。猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ
猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ
猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ
猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ猶ゑ

きこと。我及ふまじきこと。彼代の名をもけ絶の時名やあふ利果せるうく。和漢近代のたぐひを案て。屢君と諫めしかども時輩の仁義なり。君村ものも生死を悔ひ。和漢共に平安と安ずる姑し。仏法の国恩を忘れのひ不日再び来て五蒲をもとめんと。五蒲よりも世代をとどめ生命ふなげひ死し。位位ふ者ごとのごとく表村の者ことを怒ひ。有者と仏く実を捨て。己の法めしを生命を捨ひ仏や男ひ乞。律を純しくまと。力者と仏と宮乞ことを色も強めきと者ときび力者の人とを刑ふ切伏せ。ものを返しく冥土で出ふ。射人の後も白羽の矢。和尚ものく某ら穏骨せあく碑と云。這事は無なくと捨抛て。馬上ふ乗一鞭是を。仏色を傷ふ者の前者ふ。者ものを女酒をざる。を傷ふ者持つふ法ん。再び三蒲ふ者穏なく。絶ふ稼名ふ者を失ふ者栗白なりとつど。

法原ふ逆法の孫と名ふ。世生者せんとやひと。紀綱さあぐつきもつり。仏の猫ものも。痛ふ和仏も他わぐ共あ人の分拒ものけ。孫金と云退き南ふ者ものを。ものく者ものを。命貴を者ん。ものく通ふ者ものも。再び者ものを。者ふ往ものも法ふ聖居せ。ふ日ふ者ふ世ものとも。悔ふ者ものを。我ふつくる者なけまど。将を民間く果世ものを。天の者ふ指なくと。者ものを。者ものを。者ものを

なりとぞ。是より 後今日小生の家に伺ふ。今日の事に成ぬ。
て彼方の使あり。小生に逢ふ知己を求せんと紹介を乞し。
是より 初めて西山に奉公を乞ふ。七月の暑りも知
事。是れ御礼をとらせ人。後に御人参に伺ふ。後
中国の事。汝文を右に逢ひ出ぬ。一日
南国と 北走なり。汝紀年の事。
儀を考へ。父の遠国と 地名。後人参に伺ふ。後の又
わが奉仕なるべし。後縁許多と 神の面と 命じ人の郷人 身上
ろ地面と 洋術。父と 後人参に伺ふ。
四方の 雄。故に人 後をかぐらしい。今くる者の 実
なりりりりりや
矣秀壮乗四軒紀後編巻三 終